

おばすて山 奈良県

むかし、ある村でのこと。年寄りには用がないからと、村の人はみな、年をとると山に捨てられたそうです。

あるとき、ひとりの若者が、年とったお母さんを背負って山へ捨てにきました。

道のとちゅう、お母さんは、山の木の枝をぽきん、ぽきんと折っていきました。息子は、（おかあさん、何をしてるんだろう）と思いながら、山を登っていきました。

山の奥まで来て、息子がお母さんを置いて帰ろうとすると、おかあさんがいいました。

「帰る道が分からなかったら困るだろうと思って、来るときに木の枝を折っておいたよ。それを目当てに帰るといい」

息子は、

（ああ、お母さんは、おれのことを心配してくれてたんだ）と思い、泣きながら山を下りていきました。

ところが、どうしても折れた枝を見つけないことができません。いつのまにか、もとの道にもどってしまいます。何度帰ろうとしてもお母さんのところへもどってしまうのです。

とうとう、息子は、お母さんに、

「これは、きつと神さまが、お母さんを捨ててはいけないと教えているんだと思います。どうか、いっしょに帰ってください」といいました。

息子がお母さんを背負って山を下りかけると、こんどは、折れた枝がちゃんと見つかりました。

それからはもう、だれも年寄りを捨てなくなったということです。

村上郁再話

資料『子どもと家庭のための奈良の民話』村上郁再話／京阪奈情報教育出版